



## News Letter

日本小児看護学会  
第31回学術集会報告第31回学術集会長 添田 啓子  
(埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科)

第31回学術集会は、COVID-19感染拡大のためオンライン開催といたしました。日時は、2021年6月26日(土)・27日(日)LIVE配信、7月1日(木)～31日(日)オンデマンド配信でした。オンデマンド配信期間は、期間延長の要望があり当初予定より延長して配信しました。感染拡大の中でのオンライン開催であり、当初参加登録者数が伸び悩み、大赤字になるのではないかと心配ましたが、最終的には1290名の方に参加登録いただきました。広報として、複数回のメールが配信、SNSでのPRなど、理事・広報委員会・評議員の先生方・テーマセッション企画者の方々、会員の皆様に広報のご協力をいただきました。ご協力・ご参加いただきました皆様に深く感謝いたします。

メインテーマは「コラボレーションで小児看護の未来を拓く」としました。講演会場では、会長講演、特別講演、シンポジウム2件、教育講演、親の会との共同企画について、様々な場や立場のコラボレーションで、小児看護の未来を拓くことにつながる講演といたしました。親の会との共同企画では、親の会の連携で、多くのお子さんとご家族から看護職へのエールと“ありがとう”をいただきました。また、理事会から、設立30周年記念展示-学術集会の歩み-、理事会企画シンポジウム「COVID-19と子どもの療養生活」をコロナ禍で療養生活を送る子どもたちの調査をもとに報告・討議いただきました。講演をきっかけに多様な場でのコラボレーションと小児看護の未来を拓くことについて、考えていただけたのではないかと思っております。講演会場のオンライン配信期間閲覧数は406～1187回(平均807回)でした。

テーマセッションは19件を企画・登録頂きました。教育・実践・研究と多彩なテーマを企画頂き、LIVE配信時にはZOOMを使って有意義な情報共有やディスカッション、グループ討議がなされました。LIVE配信の参加者数は17-112人(平均65人)、オンデマンド配信では閲覧数92-312回(平均184回)と、多くの方にご参加いただきました。

一般演題は、感染拡大の影響で研究を進めることも困難な状況の中、口演31件、示説49件を発表いただきました。一般演題はオンライン配信とし、口演は音声付パワーポイントでの発表、示説はパワーポイントファイルでの発表としました。質疑応答は、チャットでの質問に対し回答頂けるように工夫しました。閲覧数は、口演50-341回(平均169回)、示説43-235回(平均103回)でした。口演の方が閲覧数は多く、アンケートでもオンラインの場合は、口演のみのほうが多いとの意見をいただきました。

一般演題口演・示説に「ベストいいね!賞」を設け、LIVE/オンライン配信期間に投票いただきました。口演245票、示説192票の投票があり、口演・示説それぞれ上位4題を「ベストいいね!賞」とし、HP上で発表しました。受賞者には賞状を送付させていただきました。受賞された方々、おめでとうございました。

アンケートの結果、回答数は216(回答率16.7%)でした。オンライン学術集会全体について、とても良い51%、まあよかったです48%、あまりよくなかった4%、全然よくなかった1%でした。とても良かった理由として、「実践に生かせる有意義な内容であった」「プログラムが良かった」「バラエティーに富んでいて、おもしろかった」「セミナーの内容が今欲しい情報が非常に多かった」「重なりを気にせずたくさんの講演・発表を何度も視聴できた」「都合の良い時に視聴できた」などのご意見をいただきました。よくなかった理由としては、「演題が少なく、テーマに偏りがある」、「対面の方が情報交換しやすい」などがありました。アンケートにご協力くださった皆様ありがとうございました。

今回は、第30回に続きオンライン学会となりましたが、多くの方々のご協力と、積極的に参加いただけたことで、有意義な学術集会とすることができたと思います。この学術集会で得た知見が小さな種となり、皆様が小児看護の未来を拓く研究・教育・実践を進めていただければ幸いです。

## 新理事会の紹介

### 理事長あいさつ

2021年5月30日に一般社団法人日本小児看護学会理事長を拝命いたしました、塩飽 仁(しわく ひとし)です。歴史ある学会の舵取り役を引き受けすることになり、決意を新たにして学会の発展と子どものために尽くす所存です。どうぞよろしくお願ひいたします。

本学会は1991年に発足した日本小児看護研究学会を経て、1999年に日本小児看護学会に名称を変更し、2013年に一般社団法人となりました。この30年間に日本の子どもを取り巻く環境は刻々と変わっています。

2008年に日本の人口は減少に転じました。子どもの人口が年々減少しているなかで、現在、日本では6から7人に1人の子どもは相対的貧困にあり、OECD加盟国の中で最悪の水準です。2020年に自殺した児童や生徒は415人であり、小中学生の不登校は19万人以上と、いずれも過去最多となっています。一方で、幼少期からインターネット環境で情報収集したりSNSで交流したりするのがあたりまえのZ世代が台頭しています。このように、30年前とはまったくと言っていいほど子どもの育ちと暮らしの枠組みが変わってしまいました。これらと併行・連動しながら、小児看護の現場や基礎・現任教育、法律や制度なども様々な変遷をたどってきています。

そこに2019年から始まったCOVID-19によるパンデミックが加わり、いま世の中は劇的に変貌している途上にあります。

おそらくこの先の数年で、さらに小児看護の現場とその環境は大

きく変化することでしょう。きたるべき未来を担う子どもたちを見守り、支え、ともに歩んでいくために、今起きている変化を見据え、さらに未来を予見して組織の力を高め、あるいは再構成していくミッションが私たちには課せられていると思います。



本学会の特徴は、小児看護の現場での活動の質を着実に向上していくことと、その基盤となり次のステージへの発展を先導する学術的成果の確実な積み重ねを促進すること、この二点に集約されます。

本学会に参加される方々は、個々人の関心や活動の場、目的などに応じて、自らの意向で、これら双方の特徴に即した役割を、バランスを保ちながら両立させ、最終的には同じ志を持つ仲間にその成果を還元していくというミッションを共有することを目指していると思います。その明快な意思が本学会を成り立たせ、子どもの健康と福祉に貢献するという目的の実現につながるのだと考えています。

本学会が担う役割は重要で多大ですが、皆様のご協力のもとに少しずつ着実に達成していけるよう努めてまいります。なにとぞ本学会へのご参加とご理解、ご支援をお願い申し上げます。

#### ● 一般社団法人日本小児看護学会 理事長 塩飽 仁

(東北大学大学院医学系研究科保健学専攻家族支援看護学講座小児看護学分野)

### 総務委員会

● 委員長：塩飽 仁

● 委員：野間口 千香穂、井上 由紀子、三上 千佳子、相墨 生恵、入江 直、菅原 明子

総務委員会委員長に就任いたしました塩飽です。

総務委員会は理事長が委員長を兼任し、副理事長が委員を務めることになっています。すべての委員会と連携し学会の運営業務の円滑化を図るために設けられています。

主に、庶務、会計、会員の入退会管理、外部関係機関との連携・交渉、理事会・社員総会・会員集会の運営等に従事しています。

具体的には、事業計画に基づいて予算が適切に執行されているか管理したり、厚生労働省や他の学会、日本看護協会等から依頼される調査に回答したり、小児看護に関わる提言を発出したりしています。

今期の重点的な取り組みとしては、学会活動の成果の会員や社会への還元と、より健全な学術活動と運営のために、利益相反(COI)管理の仕組み作りと会員への周知の準備を行っているところです。また、高度実践看護師(APN)や若手看護教員等の現任教育の推進も検討してまいります。

学会の事務運営は2017年度から(株)毎日学術フォーラムに委託し、同社内に事務局を置き、効率的、安定的な運営に努めています。学会へのご要望やお問い合わせは「一般社団法人日本小児看護学会事務局」までご連絡ください。

## 編集委員会

- 委員長：平林 優子
- 委員：有田 直子、小川 純子、今野 美紀、杉浦 太一、鈴木 千衣、新家 一輝、西垣 佳織  
三国 久美、山村 美枝、横山 由美、川田 悠介、小林 瞳

2021年7月から新メンバーで編集委員会が出発しました。編集委員会の主たる仕事は「日本小児看護学会誌」の編纂です。皆様からの論文投稿、査読、公開までの一連の過程に関わります。これらは「Editorial Manager®」というオンライン上のシステムを使用して行われますが、国際医学情報センターの専任編集事務局の方のサポートを受けることにより、スムーズに運営されています。編集事務局によりテクニカルチェックを受けた論文は、編集委員が2名の論文に適切な専任査読委員を選任し、査読が行われます。より質の高い、成果が読者に理解しやすい論文として公開されるように、編集委員も、査読者と投稿者の橋渡しとともに、編集としての独自の役割を担います。通常複数回の査読・修正を経て、論文が受理されると、J-stageに年3回論文が公開されます。また年1回は冊子

体の学会誌となり皆様のお手元に届きます。これらの編集作業も担っています。

現在、研究倫理もより厳正・公正さが求められていますが、編集委員会でも、適宜「投稿規定」「査読ガイドライン」等の見直をしています。また、学術集会等で、多くの論文が掲載に至るように情報提供の場を企画します。

ところで、ピアレビューを行う専任査読者は、論文の質に大きくかかわります。2022年は、任期4年の専任査読者を新たに会員から選任する年です。

本学会誌が小児看護の発展に寄与するすばらしいものとなりますように、皆様の多くの投稿をお待ちしますとともに、査読者としても是非ご尽力いただければ幸いです。

## 診療報酬検討委員会

- 委員長：萩原 綾子
- 委員：河俣 あゆみ、齋藤 香織、西田 志穂、水野 芳子、村上 寿江、山本 光映

診療報酬検討委員会は、臨床や看護教育の現場に所属している7名の委員で、小児看護および小児医療に関して診療報酬等の経済的保障の面から、現状を改善していくための提案を行うことを目的として活動している委員会です。

少子高齢化やCOVID-19の影響を受けて、子どもや家族を取り巻く環境はさらに厳しくなっています。私たちは、子どもらしく過ごす環境をまもり、子どもが病や障がいとともに成長発達し、自分が主役である人生を過ご

せるように、家族とパートナーシップを保ちながら子どもの療養環境を創ることができるように、診療報酬の観点から国に提案していきます。

委員会では、現状の課題を調査検討し、それを要望書や提案書の形で看保連を通じて発信します。また、診療報酬改定が発表されると同時にその評価を行い、次の改定に向けた活動に取り組みます。この活動は、会員の皆様の現状に関するご意見が何よりの推進力になります。忌憚のないご意見、ご要望をお寄せ下さいよう、お願ひいたします。

## 小児看護政策委員会

- 委員長：荒木 晓子
- 委員：市原 真穂、及川 郁子、河上 智香、熊谷 智子、小林 瑞穂、佐藤 奈保、西田 みゆき

今期初めて理事を務めさせていただきます荒木と申します。子どもと家族への支援が益々重要視される中、小児看護政策に関する委員会を担当させていただくことに身が引き締まる思いです。

本委員会は、予てより(1)健やか親子(第2次)に関する事項、(2)小児の養育環境・療養環境に関する事項、(3)小児看護教育制度のあり方に関する事項、(4)その他、小児看護政策に関する事項、を所掌しています。その他の一つとして、本学会は医療事故調査制度の協力学会になっており、医療機関等の要請の応じて必要な支援、専門的知識を有

する会員の紹介などを行っています。会員の皆様にもご協力いただくことがあると思いますので、その時はよろしくお願いいたします。

今期は、特に、前期に作成した「成人患者との混合病棟における子どもの療養環境向上のための具体的対策(提言)」のリリース、小児看護に係る高度実践看護師の役割の明確化などに取り組む計画です。

少子化を背景に小児の療養環境が大きく変化し、医療的ケア児支援法も施行され、ここで更に小児看護の役割を再認識し、機を捉え発信していくことが重要と考えます。委員一同熱い思いで取り組んで参ります。

## 国際交流委員会

国際交流委員会委員長に就任致しました加藤です。新型コロナウイルス感染症の世界規模でのパンデミックにより、国際交流活動に困難な状況が続いています。現在、会員の皆様のお役に立てる活動に結び付くよう、委員会メンバーと本委員会の果たすべき役割の検討を重ねています。

現在の所掌事項は、以下の3項目です。

(1)アジア太平洋看護師協会と世界看護科学学会等における国際交流活動、(2)小児看護関連の国際学会に関する情報収集・発信、(3)その他、国際交流に関する事項。

- 委員長：加藤 令子

- 委員：金泉 志保美、藤田 優一、本田 順子、名古屋 祐子、西川 菜央

2021年10月に、所掌事項3.その他の国際交流に関する企画として、「世界の小児看護を知ろう、日本の小児看護を世界に伝えよう!~そのための準備~」を開催致しました。

今後の活動のひとつとして、「日本に在住されている海外のこどもへのケアの現状」のセッションを企画し、国内の状況に目を向けることになります。現在、様々な国の方が国内で生活をされおり、こどもが受診や入院をしています。ことはや文化等の違いがあり、看護師達は戸惑いを感じながらケアをしていることが推測されます。そのため、現状と課題を明らかにし、今後に向けた取り組みを皆様と検討したいと考えています。

## 学術・研究推進委員会

● 委員長：二宮 啓子

● 委員：泊 祐子、濱田 米紀、本田 順子、岡永 真由美、山本 陽子、清水 千香

2021～2022年度の学術・研究推進委員会は、二宮啓子（委員長）、泊祐子、濱田米紀、本田順子、岡永真由美、山本陽子、清水千香の7名で活動しています。

学術・研究推進委員会は、(1)会員を対象とした小児看護の実践・教育に関する調査・研究の助成、(2)学会誌に掲載された優れた論文のなかから研究奨励賞の選考、(3)学術集会の支援、(4)その他学術・研究推進に関する業務を担当しています。

第31回学術集会では、コロナ禍での開催となり、添田啓子会長のもと企画委員の皆様の工夫と努力により、1290名の参加者が得られ、満足

度の高い学術集会になりました。現在は、第32回学術集会の開催に向けて支援を行っています。並行して、2021年度研究奨励賞の選考も行っています。また、COVID-19感染拡大の影響を受け、調査・研究を進めることが難しく、学術集会もほとんどがオンライン開催になっていることもあり、「日本小児看護学会研究助成」や「川出富貴子国際発表助成」の応募が少ない状況です。会員の皆様に応募して頂けるように広報活動を行って参ります。

COVID-19の終息を祈りつつ、子どもの健康増進に寄与することができるよう、会員の皆様の実践・教育・研究を支援していきたいと思います。

## 広報委員会

● 委員長：渡邊 毅子

● 委員：筒井 真優美、西垣 佳織、新家 一輝、鈴木 千琴、杉澤 亜紀子

広報委員会は、学会活動や成果物他、小児看護に関する様々な情報を会員の皆様と共有すること、そして社会に発信していく役割を担っています。そしてこれら活動が、小児看護の実践・研究・教育に、そして子どもと家族に寄与していくことを目標に取り組んでいきます。

学会誌バックナンバーや学会成果物・政策提言、小児看護スキルアップ研修(e-learning)のご案内、COVID-19関連情報等をホームページに掲載しておりますので、是非ご活用ください。

## 倫理委員会

● 委員長：三輪 富士代

● 委員：石浦 光世、品川 陽子、松岡 真里、坂田 友、高谷 恭子、松本 貴子

社会や医療現場はめまぐるしく変化し、子どもの生活や健康に関わる倫理的な課題は山積する中、新型コロナウィルス感染拡大による新たな課題も出てきました。倫理委員会では、子どもの権利擁護と、看護師が直面する倫理的課題の解決に向け、今期は「倫理的感性・意識の向上」、「委員会作成の指針の周知と活用」を目標に取り組んでいます。学術集会では、「小児看護の現場での倫理的なモヤモヤ、一緒に考えてみませんか?」というテーマセッションを行い、今年2月には同内容の研修も企画しています。「倫理」と聞くと難しく考えてしまいますが、日々当たり前のように

に実践している看護の中で“モヤモヤ”することこそが課題を見出すきっかけであり、話し合うことが重要だと思っています。また、『小児看護の日常的な臨床場面での倫理的課題に関する指針』(2010)の改定版を配布予定です。『子どもを対象とする看護研究に関する倫理指針』『子どものエンド オブ ライフケア指針』の活用拡充も手がけていきます。小児看護の現場の課題を見出し、私たちの目の前の“子どもにとっての最善は何か”を追求していきます。会員の皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

## 災害対策委員会

● 委員長：野間口 千香穂

● 委員：松浦 和代、近藤 美和子、西田 みゆき、伊藤 久美、上原 章江、鎌田 佳奈美、祖父江 育子、草野 淳子、荒武 亜紀

災害対策委員会は、2013年から常設委員会として活動しています。平時の災害対策と災害発生時の災害支援を支えることが主な活動です。委員は各地区の評議員であり、同時に地区リーダーとしての役割を担っています。平時から、ネットワークを構築することで、大規模災害が発生した際に会員の皆様の活動が継続でき、子どもたちとその家族への支援が届くような体制づくりを行っています。

本委員会発足のきっかけとなった東日本大震災以降も日本は地震や豪雨による大きな災害を経験してきました。そして、2020年には世界中の

人々の命や生活がCOVID-19の感染拡大によって多大な影響を受け、今もなおその影響は続いている。この影響も災害としてとらえて活動を行っております。災害対策の中でも、子どもと家族に対する中長期的支援に貢献することを目指して、引き続き活動を行っていきたいと考えています。今後も学会ホームページによる災害関連情報の発信、研修会の開催、関連学会や団体とのネットワークの促進に努め、会員の皆様が行う災害に備える活動、災害発生時やその後の支援活動に役立つ体制の充実に努めてまいります。

## 教育委員会

初めて理事に選出いただき教育委員会委員長を拝命しました来生奈巳子です。

教育委員会は、小児看護実践の質向上のための研修の企画・運営、地方会の開催委託等を所掌しています。これらに加えて今期は、学会創設30周年記念として企画され2020年12月に運用を開始した小児看護スキルアップ研修を担当しています。「小児看護実践基盤」と「医療依存度の高い子どもと家族の看護」の2コースがあり、e-learningと一部オンライン集合研修で実施していますので、多様な場で小児看護に携わる看護師がいつでもどこからでも受講できます。既に各コース300名近くの方が

● 委員長：来生 奈巳子

● 委員：岩崎 美和、佐藤 奈保、西田 志穂、山田 咲樹子、野村 智実

受講しており、修了者も増えています。現在のコロナ禍を知る由もなかった2018年に前期理事の皆様がこの企画をしてくださったことに只々感謝いたします。居住地を問わずに参加できるオンライン研修やe-learningは小児看護の質向上に寄与するだけでなく、ポストコロナ時代の新しい教育のあり方となっていくことが予測されます。よって、この研修事業を継続、発展していくことが責務であると認識しています。

時代の変化に即して教育委員会の役割・機能を再考し、学会員の皆様に貢献できるよう委員一丸となって取り組んでまいりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

## 選挙管理委員会

選挙管理委員会は、公正かつ中立な立場で、評議員選挙（4年毎）、理事選挙（2年毎）に関わる事項について、学会事務局と協働して、選挙を管理・執行しています。本委員会の任期は他の委員会と異なり4年であり、2021年度は3年目にあたりました。

評議員選挙は、会員の皆様の投票により行われ、理事は評議員の投票により選出されます。理事および評議員は会員の代表として、本学会の発展のために委員会を構成して活動されています。

つまり、会員皆様の1票が学会を作ることに繋がります。前回の評議員選挙からWEB投票を導入して、被選挙人の所属と氏名が分かるように

● 委員長：内 正子

● 委員：友田 尋子、小野 智美、本田 順子、丸山 浩枝

なりました。

2020年度の選挙で初めて評議員になられた臨床で働く方から、「評議員として選出された時は大変驚いた。その後、委員長から声をかけていただき、委員としての仕事が務まるのか自信がなかったが、臨床で働く看護師の代表を務める気持ちでお引き受けした。小児看護の発展に寄与できればと思っている」というメッセージをいただきました。

まずは選挙に参加することから始まります。本委員会の活動にご理解いただき、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

## 研究奨励賞受賞者より

● 遠藤 晋作

この度、論文「先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明プロセス」にて、研究奨励賞を頂きました。このような名誉ある賞に選んでいただいたことを大変光栄に思うと共に、身の引き締まる思いです。

この研究は私の臨床時代の疑問から、大学院の修士課程、そして博士課程に至るまで、ライフワークとして取り組んできた研究の一部です。病気をもつ子どもたちは、日々の社会生活の中で、他の子どもたちとの違いを感じながらも成長発達をしていく。「なにかが違う」と感じながらも、その違いについて十分な理解ができていない。では子どもはどうやって病気の理解を深めているのだろう、そしてそれは子どもにとってのキーパーソンである母親による説明による影響が大きいが、そもそも母親はどのようなプロセスの中で子どもに病気の説明を行っているのだろうか。このような疑問から取り組み始め、積み上げてきた研究となります。今回は結果として、「誰も知り得なかっ全く新しい概念」を明らかにしたものではなかったかとは思います。しかし、母親がどのような理解の下、どのように子どもに病気説明を行っているのか、それには何が影響し、どのように支援がなされていくべきなのか、今まで「感覚的に理解されていたこと」を、一定の形として示せたことにこの研究の価値はあったのではないかと私自身は考えています。今回示した研究結果が、少しでも臨床現場や、子どもたちのための

新たな研究に活かされていけば幸いですし、私自身も今回の研究結果を今後より発展させていきたいと考えています。

また分析においては、SCAT(Steps for Coding and Theorization)という手法を用いました。この手法は医学教育学・教育社会学等、多様な研究分野で活用されます。看護領域においても、この分析手法を用いた質的研究は近年徐々に増加しておりますが、小児看護学分野の中で、ある程度先進的に取り入れられたことにも価値があったと考えています。「質的データの潜在的意味を構造的に見出す」という特徴を活かし、より本質的な分析が行えたと考えております。



最後になりましたが、本研究の実施にご協力頂きました、研究協力者、臨床の医師・看護師の皆様、そして研究をまとめるにあたりご教授頂き、共同研究者としてもお力添えを頂きました堀田法子先生、上田敏丈先生に心より感謝申し上げます。また今回選考に携わって頂きました先生方におかれましても、このような何ものにも代え難い機会を頂きましたことに、心より感謝申し上げます。

今後も自分なりに研究者として小児看護に貢献できる道を考え、努力を続けていきたいと思います。この度はありがとうございました。



## 「リレートーク」・古橋 知子さん



### 自己紹介

福島県郡山市で生まれ育ち、聖路加看護大学への進学を機に上京しました。大学卒業後は東京と兵庫で、看護師としての臨床経験や助手経験、大学院での学びを積みました。修了後は新設の小児専門病院に就職し、神奈川で1年間の研修、宮城での看護支援システムのマスター作成業務などの開院準備という稀有な経験もさせていただきました。2006年に福島県にUターンし、新設ポスト「身分は看護学部、仕事の8割は附属病院でのCNS活動」にチャレンジしてから、はや16年目を過ごしています。

### 看護師になったきっかけ

高校で進学先を考え始めた頃、叔母、姉が看護師で身近な職業としてあり、でも英語にも関心があって捨てがたい。そのような迷いのなか、母親から日野原先生の書籍と共に聖路加看護大学を紹介され、「どちらとも」の可能性を見つけました。いざ学び始めてみて、看護はこんなにもアセスメントに基づく意図的な介入であったことを知り、興味が深まりました。実践の科学、実践してみなければわからない!と、看護師としての就職を選びました。

### 新人時代の思い出

希望を叶えていただき、来生婦長率いる小児病棟に配属されました。病棟には新人8名が一気に入り、子ども達に危害を加えやしないかと恐れ、とにかく懸命に働きました。先輩はもとより、身の危険を感じたであろう子ども達には、ほんとうに忍耐強く、寛大な心を持って育てて頂きました。様々な成長発達段階の子ども達が、多くは保護者の付き添いなく入院している病棟でした。プライマリーナーシングですが、内服薬を飲ませる「メディケーション係」が一部機能別にありました。準夜勤の先輩から「なぜ日勤帯の●時までに飲ませてない?」と怒られたくないという気持ちに後押しされながら、服薬間隔や子どもの生活時間を考慮し、与薬専用カートを持って薬を飲ませ

歩きました。小児がんの子ども達の嘔気が薄れる「今なら飲める」というタイミングを逃さぬようにすることや、「ファンギゾンシロップはカフェオレ割、アルミホイルで覆い、直前まで冷やしたものをストローで」など、子どもが主体的に「これなら飲める」という個々に応じた方法を尊重することは、“当たり前”的として刻み込まれました。

### 小児看護の魅力

環境の影響を大きく受ける子どもに対しては、看護の真価が最も問われるのではないかと感じています。子どもはその豊かな感性と鋭い洞察力によって、状況や人を良く見極めているなと思います。子どもが発するサインに気がつき、それを的確に解釈できるか。また子どもを中心据えて最善の利益を考え、自分を律して行動できるか否かによって、結果は大きく違ってきます。責任と同時にやりがいも大きく、常に新鮮な学びが得られるところも魅力です。

### ストレス解消法

歩く、寝る、話すに加えて、ここ最近はもっぱら「多肉植物を愛でる」ことがストレスケアであり、癒しとなっています。

### 後輩たちに期待すること

子どもの何気ない言動には、とても重要な意味が潜んでいることがあります。どのような文脈のなかで生じたものか俯瞰的に捉え、丁寧な対話と想像力によって子どもの体験している世界を理解しようと続けることにより、大切なものが見えてくることを子どもたちに教えて貢っています。

子どもおよび家族、それを取り巻く人や場には、多様な文化や価値観が存在します。ミスコミュニケーションを回避し、意思疎通や相互理解には「言葉」が重要となります。言葉を用いて伝える技術を磨き、記録を活用して思考の可視化、共有を図って欲しいと思います。

バトンを受けて欲しい人 (災害対策委員会でお世話になった)野間口 千香穂先生

## 研修会「世界の小児看護を知ろう、日本の小児看護を世界に伝えよう!」についての報告

### ●国際交流委員会メンバー

加藤 令子、金泉 志保美、藤田 優一、本田 順子、名古屋 祐子、西川 菜央

課題や失敗談をお話いただき、その後参加者とディスカッションの時間を設け、会員の皆様の疑問にお答えできるような時間を作りました。

4名の講師それぞれが、誰しもが経験する語学の壁や文化の壁などの苦難を乗り越えながらこれまで国際交流を続けてこられたことや、それまでの準備についてご自身の失敗談も踏まえながら非常にわかりやすく、楽しくお話し下さいました。また、国際交流を行う中で得られた、ご自身の小児看護の視野の拡がりや活動へのエネルギーについても具体的にお話いただき、これから国際交流を行おうと考えている参加者の皆様にとって非常に励みになり、さらに国際交流への意欲が高まるような内容でした。ディスカッションでは、具体的な語学習得の方法や論文作成の方法、国際学会へ参加した際の参加者との交流、学会発表時の質疑応答のコツなどについて参加者から質問があり、今後の国際交流を進めるうえでのヒントや普段なかなか聞けないことを情報として得られる場になったのではないかと思います。

## 日本小児看護学会第32回学術集会に向けて



日本小児看護学会第32回学術集会開催まであと半年余りとなりました。様々な形で開催にご支援、ご協力いただいている皆様に心より感謝申し上げます。今回の学術集会のメインテーマは、「今、目の前のこの子にできること～子どもの尊厳、生活、未来を守る小児看護実践～」といたしました。

私たちは、日々、子どもへの看護の現場で、様々な状況に直面しています。発達や病気の状況によって、子どもの意思がわからない時、子どもへの治療の選択が難しい時、そして毎日当たり前のように看護を実践している時、「目の前の子ども」に対して、「最善を考えているか」と自問自答の連続です。本集会では、社会や医療のシステムが複雑に変化する中で、目の前にいる子どもの未来を守っていくために、私たちに何ができる、何をすべきなのか、改めて考えたいと思います。

● 学術集会長 三輪 富士代（福岡市立こども病院 看護部長）

さて、今回の企画をご紹介いたします。特別講演では、「難病の子どもとその家族へ夢を」代表理事の大住力先生と太宰府天満宮の顧問である味酒安則先生から子どもの夢の支援や子どもを守り育てることについてお話を頂きます。教育講演では、久留米大学医学部小児科学講座主任教授の山下裕史朗先生に、子どもの発達の基礎やその対応、厚生労働省子ども家庭局母子保健課の先生には、母子保健の現状と課題についてご講演頂きます。シンポジウムでは、「日々の実践で子どもの権利を守ること」や「基礎から臨床の場での小児看護実践の教育」について考えたいと思います。また、看護実践を中心とした指定テーマセッション等も予定しています。演題募集も開始いたしました。小児看護に関わる様々な現場の皆さんから、多くのご報告を頂き有意義な意見交換の場になればと願っています。企画委員一同、一生懸命に、準備を進めていますので、多数の方のご参加を心よりお待ちしています。

学術集会テーマ：今、目の前のこの子にできること～子どもの尊厳、生活、未来を守る小児看護実践～

【会期】2022年7月9日(土)～10日(日)

【会場】一般財団法人 福岡コンベンションセンター 福岡国際会議場

【プログラム（1日目）】

会長講演 「子どもの尊厳、生活、未来を守る看護実践～看護実践と基礎教育、小児看護専門看護師と看護管理者の経験から～（仮）」  
三輪 富士代（福岡市立こども病院 看護部長）

特別講演 「私がディズニーと、難病を患う子どもとその家族に教えてもらったコトと、いま、実践しているコト」  
大住 力（Hope&Wish 公益社団法人 難病の子どもとその家族へ夢を 代表理事）

教育講演 「発達障がいに関する基礎的知識と子どもや家族へのかかわり（仮）」  
山下 裕史朗（久留米大学医学部 小児科学講座主任教授）

シンポジウム 「看護師さん、ねえ、見て、聞いて～日々の実践で子どもの権利を守ること～（仮）」

一般演題（口演・示説）、テーマセッション、共催セミナー、患者会・展示等

【プログラム（2日目）】

特別講演 「天神さまの細道の先～子どもの守り神～」  
味酒 安則（太宰府天満宮 顧問）

教育講演 「母子保健の動向と子育て世代包括支援センターの現状と課題（仮）」  
厚生労働省子ども家庭局母子保健課（母子保健指導専門官）

シンポジウム 「子どもと家族の反応と行動の意味を捉えて対応を考える基礎教育・臨床教育（仮）」

一般演題（口演・示説）、テーマセッション、共催セミナー、患者会・展示等

【一般演題（口演・示説）・テーマセッション企画登録期間】2021年12月20日(月)～2022年2月14日(月)

【JSCHN第32回学術集会URL】<https://jschn32.org/>

【参加費用】

会員（事前）:10,000円 会員（当日）:12,000円

非会員（事前）:12,000円 非会員（当日）:14,000円

学生（事前・当日とも）:3,000円 ※大学院生や認定看護師教育課程等は除きます。

※非会員の参加費には消費税が含まれます。

【事務局】

学会事務局:地方独立行政法人福岡市立病院機構 福岡市立こども病院 看護部

運営事務局:株式会社JTBコミュニケーションデザイン

E-mail: jschn32@jtbcom.co.jp

### 広報委員会メンバー

- 委員長：渡邊 輝子 ● 委員：筒井 真優美、西垣 佳織、新家 一輝（第59号編集長）、鈴木 千琴、杉澤 亜紀子